



回復期リハビリテーション病棟における ICFの臨床活用

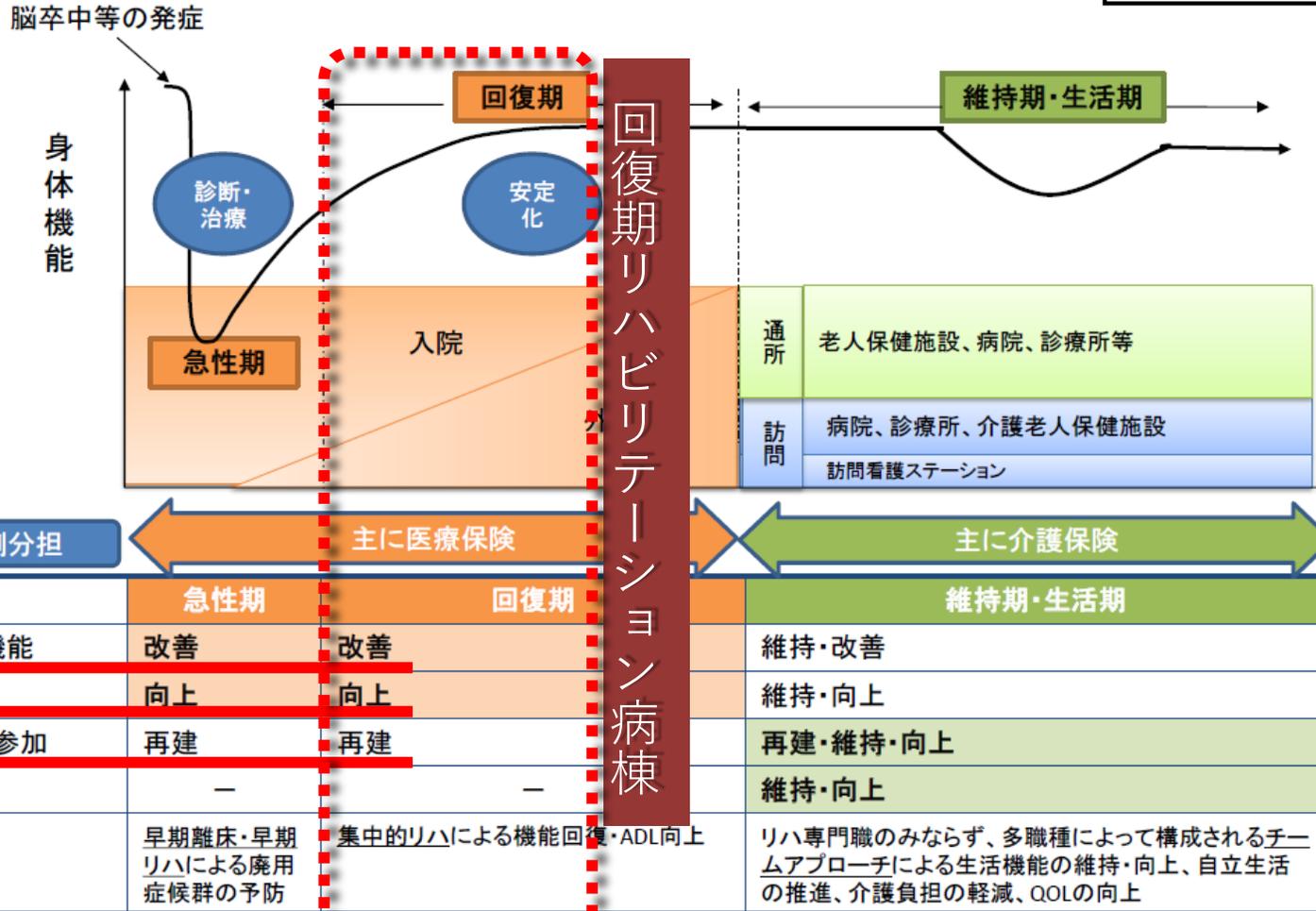
～「参加」志向型のリハビリテーション実施計画書の試み～

○ 後藤伸介^{1・2)}、外山 稔^{1・3)}、佐藤妙子^{1・4)}、坂田祥子^{1・5)}、森田秋子^{1・6)}

- 1) ICFとリハビリテーション連携を考える会、2) やわたメディカルセンター リハビリテーション技師部
- 3) 国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 言語聴覚学科、4) 国際医療福祉大学 保健医療学部 言語聴覚学科
- 5) 東京湾岸リハビリテーション病院 リハビリテーション部、6) 鶺鴒リハビリテーション病院 リハビリテーション部

リハビリテーションの役割分担

中医協 総 - 1 - 1
23. 12. 7 改



(資料出所) 日本リハビリテーション病院施設協会「高齢者リハビリテーション医療のグランドデザイン」(青海社)より厚生労働省老人保健課において作成

出典：厚生労働省 第2回 医療と介護の連携に関する意見交換会 平成29年4月19日



リハビリテ

脳卒中等の発症

身体機能

診断・治療

急性期

入院

役割分担

主に医療保険

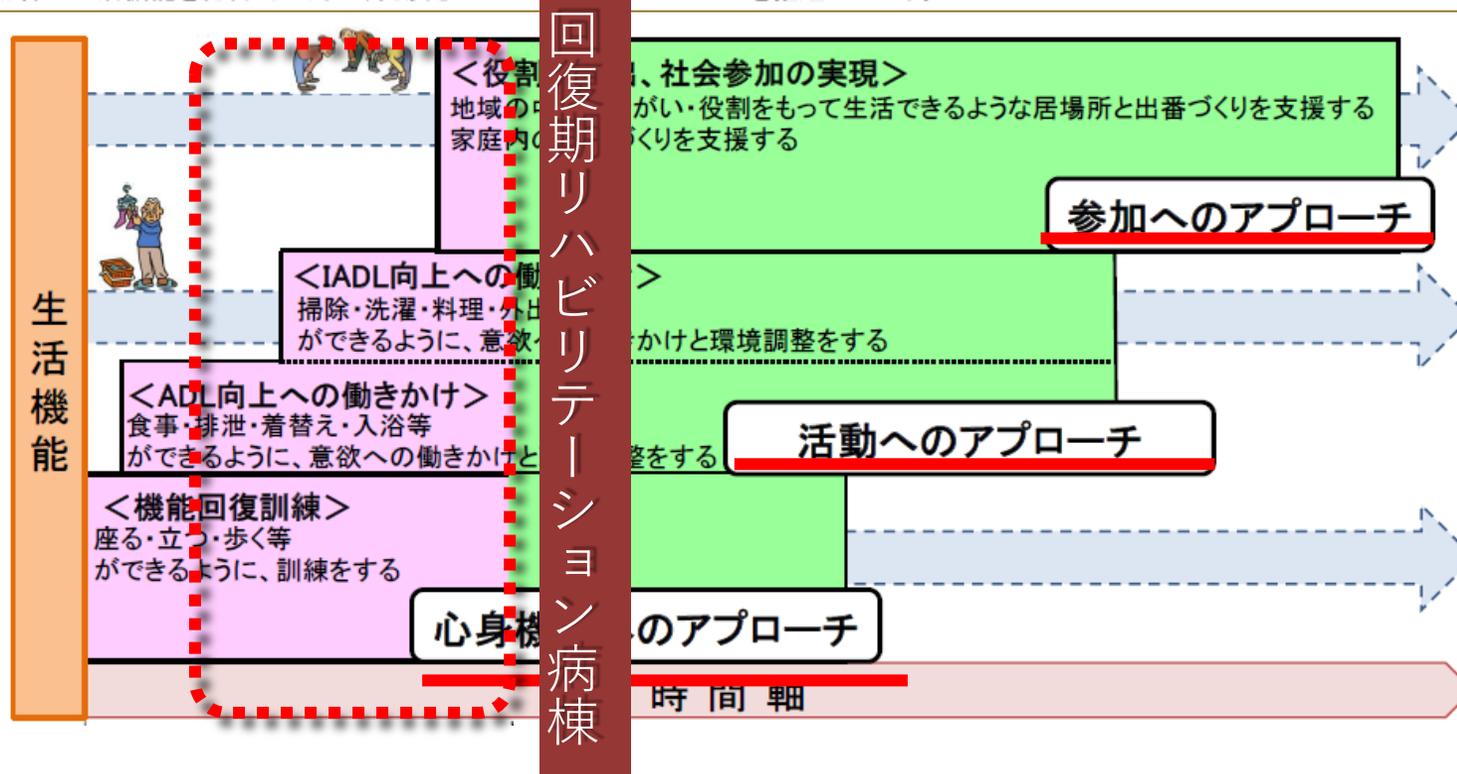
	急性期	回復期
心身機能	改善	改善
ADL	向上	向上
活動・参加	再建	再建
QOL	—	—
内容	早期離床・早期リハによる廃用症候群の予防	集中的リハによる

(資料出所) 日本リハビリテーション病院・施設協会「高齢者リハ」

リハビリテーションの展開と3つのアプローチ

中医協 総 - 2
27. 12. 2

- 介護保険においては、心身機能へのアプローチのみならず、活動、参加へのアプローチにも焦点を当て、これらのアプローチを通して、利用者の生活機能を総合的に向上、発展させていくリハビリテーションを推進している。



出典：厚生労働省 第2回 医療と介護の連携に関する意見交換会 平成29年4月19日



医学的リハビリテーションの進め方(参考)

- 医学的リハビリテーションは、心身機能の回復訓練に終始するのではなく、常に予後を意識し、残存機能を活かした活動、参加を念頭に置きながら進めることが推奨されている。
- 特に患者について予測される予後等から「参加」レベルの目標を設定し、そこから逆算して活動の目標、心身機能の目標を各分野の共通認識としてリハビリテーションを進めることが望ましいとされている。

医学的リハビリテーションの進め方の分類

0. 心身機能の回復訓練に終始する場合

- リハビリテーションとは呼べない。

1. 段階論的アプローチ

- まず心身機能の回復に努め、それが頭打ちになったらADL訓練などの「活動」に対する働きかけに達して初めて「参加」について考える。目標は具体的ではなく「ADL自立性向上」「自宅復帰」など

2. 同時並行的アプローチ

- 理学療法・作業療法・言語聴覚療法・ソーシャルワークなどを並行して開始し同時に進めていくが、それぞれが十分に、分立・分業的であり、目標すら「理学療法の目標」「作業療法の目標」などとバラバラで設定

3. 目標指向的アプローチ(もっとも望ましい)

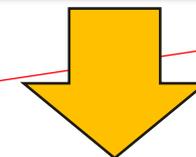
- 心身機能、活動、参加の「予後」(適切なリハビリテーション・プログラムでそれぞれがどこまで回復するかの予測)を総合し、患者の環境因子、個人因子をも十分考慮して「参加レベルの目標(それをどう活動で実行するかを含む)」の候補(選択肢)を最低3つつけて患者に提示する。もちろんこの選択肢はチームの知恵を集めて作る。
- 患者が熟慮し、家族とも相談して、3つのうち1つを選べばそこで「参加の目標」が決まり、そこから逆に「活動の目標」「心身機能の目標」が決まる。この共通の目標を目指して、各分野が緊密に協業してプログラムを進める。

出典:上田敏「標準リハビリテーション医学 第3版」

3. 目標志向的アプローチ

患者が熟慮し、家族とも相談して、(中略) **「参加の目標」**が決まり、そこから逆に「活動の目標」「心身機能の目標」が決まる。

この**共通の目標**を目指して、各分野が**緊密に協業**してプログラムを進める。



「参加」に志向した
アプローチが望ましい



医療で用いられている リハビリテーション実施計画書の標準様式

病名 **疾病情報** など

心身機能・構造

基本動作

生活機能情報 (機能・活動)

栄養

要介護・障害認定

治療方針・内容など

目標と、具体的な対応方針

参加

活動

心理

環境

家族

回復期リハ病床 9万床 / 全国
 × 利用率 88%
 × 計画書作成率 95%
 = データ数 **7万5千件** / 月

活用されれば、
 医療の質の検証
 医療・介護連携の推進

様式23：厚生労働省

2019年回復期リハビリテーション病棟協会 実態調査より

医療で用いられている リハビリテーション実施計画書の標準様式

病名、発症日、リスクなど

心身機能・構造

基本動作

日常生活活動 (実行状況)

栄養

要介護・障害認定

治療方針・内容など

目標と、具体的な対応方針

参加

活動

心理

環境

家族

復職

就学・復学

家庭内役割

社会活動

趣味

移動

自動車運転

交通機関利用

排泄

食事

整容

更衣

入浴

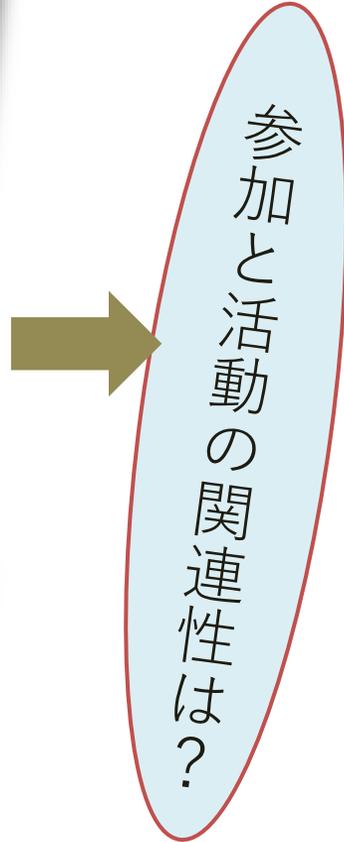
家事

書字

コミュニケーション

(生活・人生の) 目的なもの

要素的なもの



様式23：厚生労働省



医療で用いられている リハビリテーション実施計画書の標準様式

病名、発症日、リスクなど

心身機能・構造

基本動作

日常生活活動 (実行状況)

栄養

要介護・障害認定

治療方針・内容など

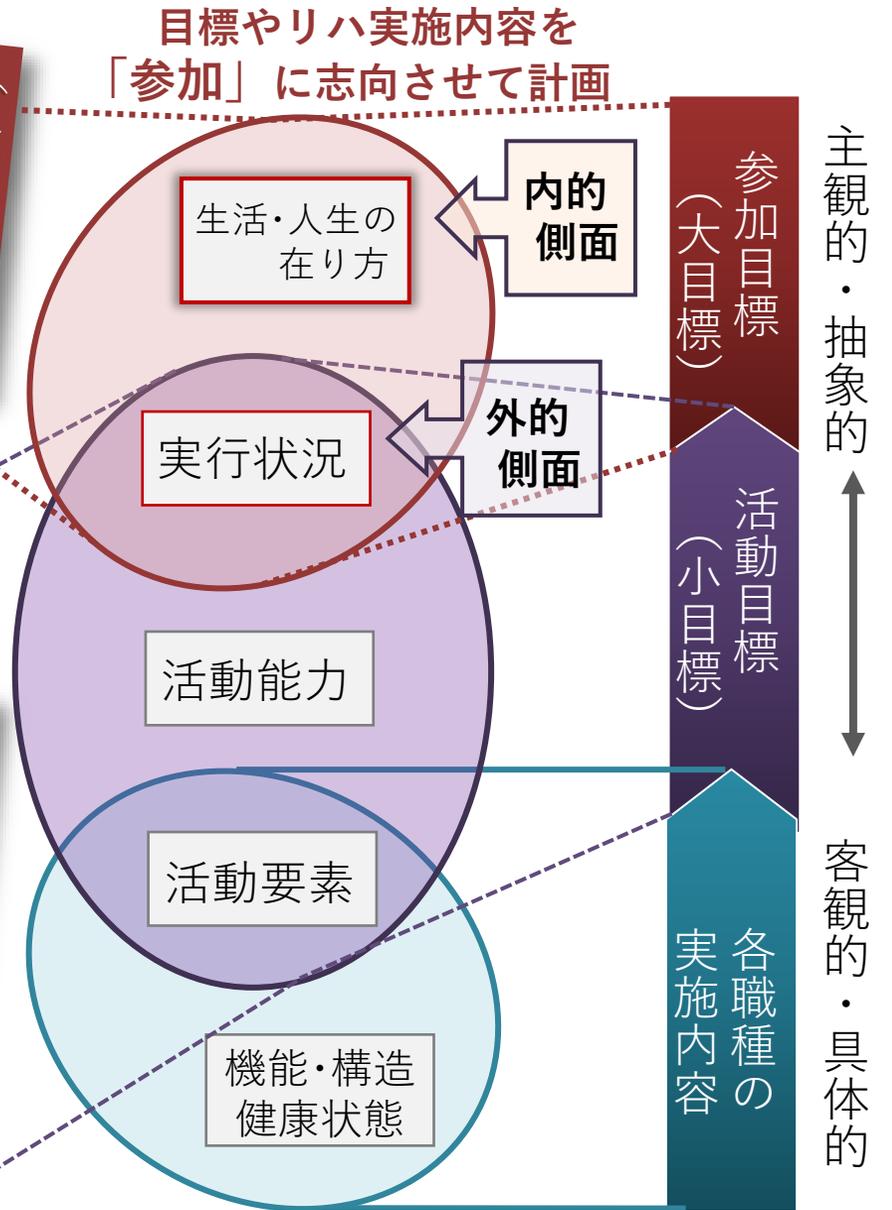
様式23：厚生労働省

目標と、具体的な対応方針

参加	<ul style="list-style-type: none"> 復職 就学・復学 家庭内役割 社会活動 趣味
活動	<ul style="list-style-type: none"> 移動 自動車運転 交通機関利用 排泄 食事 整容 更衣 入浴 家事 書字 コミュニケーション
心理	<ul style="list-style-type: none"> 精神的苦痛 学習の苦痛 その他
環境	<ul style="list-style-type: none"> 自宅の改装等 福祉機器の導入 社会福祉サービス その他
家族	<ul style="list-style-type: none"> 家族構成の変化 家族内役割の変化 その他

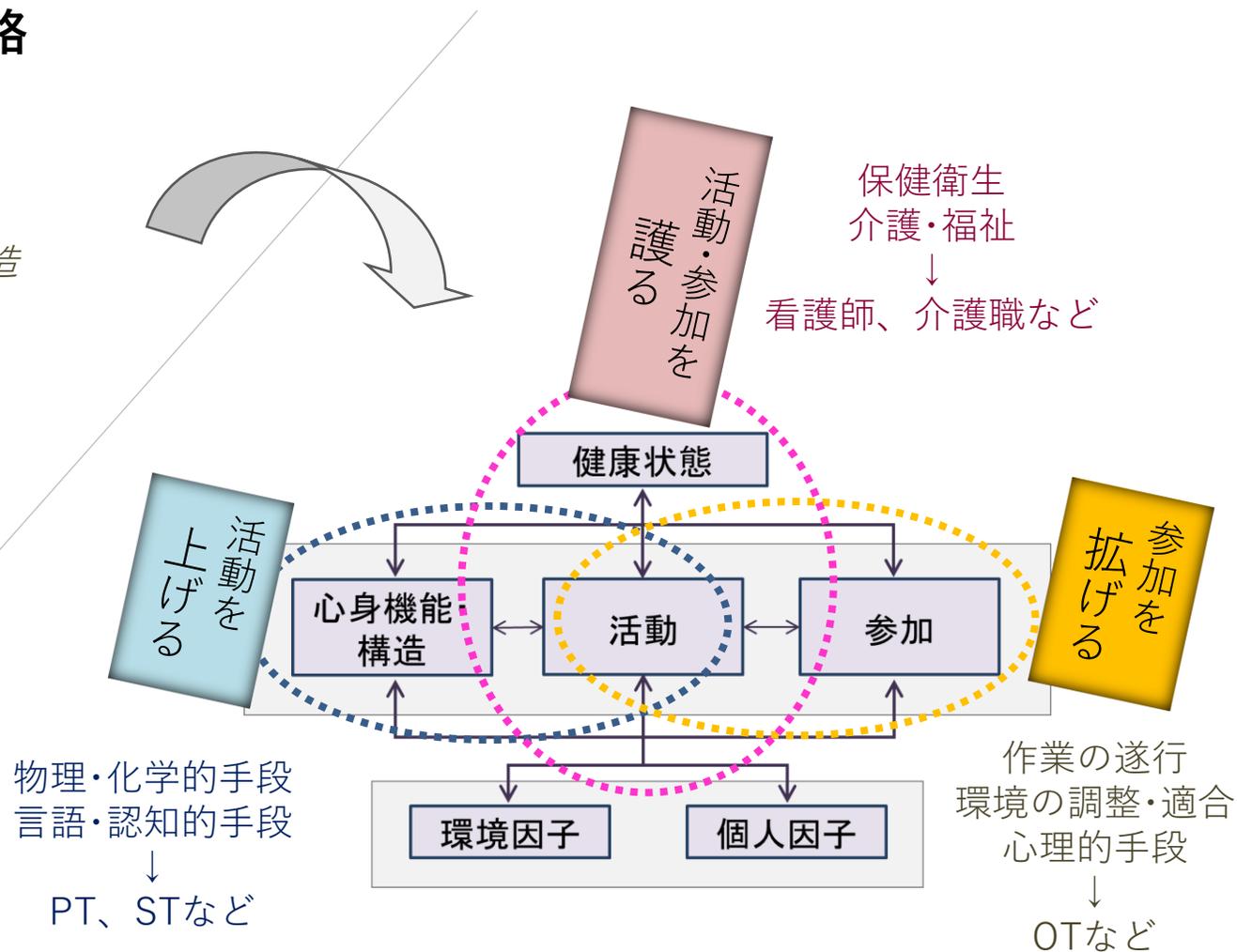
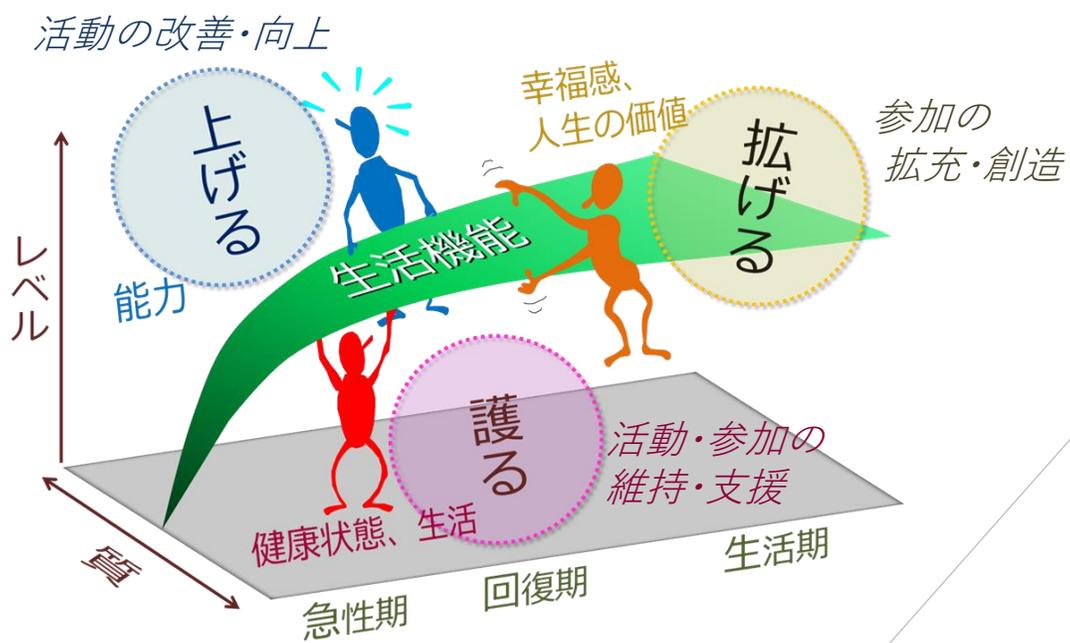
目的・的なもの
(生活・人生の)

要素的のもの



ICFをもとにした多職種協働モデル

活動・参加に対する 3つのリハビリテーション戦略



生活機能モデルに基づく専門職の主たる役割 (例)



参加志向型のリハビリテーション実施計画書の様式例

(やわたメディカルセンター)

リハビリテーション総合計画書

ID _____ 書類種別 _____ 計画日 _____

氏名 _____ 性別 _____ 年齢 _____ 要介護認定 _____
障害者手帳 (種別) (程度)

病名 _____ 発症日 _____ (経過) _____ 併存疾患・リスクなど _____

手術 _____ 手術日 _____ (経過) _____

入院日 _____ (回復期病棟入棟 _____ 目) リハ開始 _____ 日

心身機能・構造の障害

呼吸 ()	感覚 ()	体重 ()	栄養 ()
酸素 ()	疼痛 ()	体格指数 ()	栄養方法 ()
循環 ()	拘縮 ()	栄養状態 ()	嚥下調整食 ()
左室駆出率 ()	言語 ()	熱量・必要/総摂取 ()	⇒栄養状態 ()
排泄 ()	高次脳 ()	蛋白・必要/総摂取 ()	基本動作 ()
嚥下 ()	精神 ()	起き上がり ()	立ち上がり ()
筋力 ()	発達 ()	座位保持 ()	立位保持 ()
麻痺 ()	その他 ()		

日常生活活動 (実行状況)

項目	初期		現在		目標		備考 (用具や介助内容等)
	自立度 (FIM)	自立度 (FIM)	自立度 (FIM)	自立度 (FIM)			
セルフケア	食事						
	整容						
	入浴						
排泄	更衣/上						
	更衣/下						
	トイレ						
移動	排泄						
	排便						
	ベッド等						
移動	浴槽						
	歩行						
	(補助具)						
認知	車椅子						
	階段						
	理解						
認知	表出						
	社会的交流						
	問題解決						
生活環境	記憶						
	居住場所						
	職業・就学						
生活環境	その他						
	前回からの変化や経過						
	主治医	理学療法士					
担当者	リハビリ士	作業療法士					
	看護師	言語聴覚士					
	介護福祉士	ソーシャルワーカー					
説明者	管理栄養士	薬剤師					
	署名						
	説明日: _____ 年 _____ 月 _____ 日						
説明を受けた人	本人、家族等 (続柄) _____						
ご署名							

リハビリテーション総合計画書 (別活用紙)

(再掲)

今後の見込み		前回からの変化や経過	
退院(終了)時期	6月末	病状が良ければ、杖歩行が自立してできるようになりました	
(退院先)	自宅	リハビリテーション実施内容	
社会活動	町内レベル		
住宅改修	玄関等の手摺り	方針	趣味を楽しみながら地域生活ができるようになる
福祉機器・用具	不要	目標	町内のホームセンターに歩いて行くことができる
介護の必要性	外出援助		

活動目標とリハビリテーションの具体的方法

入院時訪問指導: あり 運動量増加機器: あり

項目	目標内容	期間	担当
1 ①	入浴	2週間	看護師
1 ②	浴槽の出入りや洗体を一人で行う。		作業療法士
1 ③	洗体は一部介助、浴槽出入りは一人で週3回の入浴を行う。		理学療法士
2 ①	共通目標に		
2 ②	左下肢の筋力増強運動と立位バランス練習などを行う。		
2 ③	屋外を片道300m歩いて、買物をする。		
2 方法	①	歩行のバランス練習と、トレッドミルでの持久力運動を行う。	
	②	病棟内での自主歩行運動の記録ノートを確認し、励ます。	
	③	紙幣と硬貨を識別し、商品の支払いを行う。	

多職種で

担当者: 看護師, 作業療法士, 理学療法士, 言語聴覚士

参加

活動

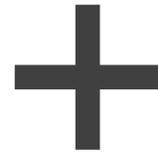
共通目標に

多職種で

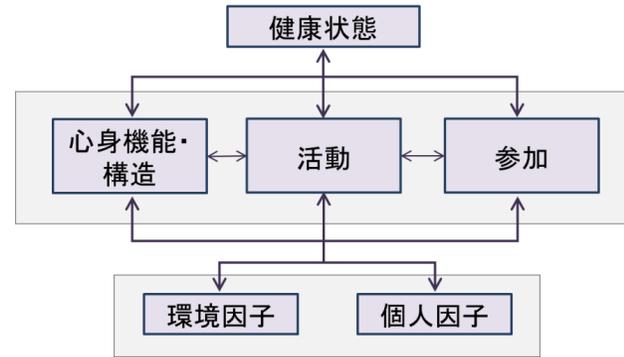


リハビリテーション
実施計画書

The image shows two pages of a Japanese rehabilitation plan form. The left page is titled 'リハビリテーション実施計画書' (Rehabilitation Plan) and contains a summary of patient information, diagnosis, and treatment goals. The right page is titled '具体的なリハビリテーション内容' (Detailed Rehabilitation Content) and lists specific activities and interventions to be performed.



ICF



臨床
活用



リハビリテーション医療の質向上

